

国際理解教育・開発教育 継続的な実践のヒント

~~~~~

今回の紙上インタビューは、岐阜県立恵那高等学校 夏目佳代子先生に、「継続的に実践をするヒント」についてお伺いしました。所属校や受け持つ学年が変わっても一貫して開発教育の実践に取り組まれている夏目先生のインタビューには、継続へのヒントが満載です。ぜひご覧ください！

~~~~~

Q1) 夏目先生と国際理解教育・開発教育との出会いを簡単に教えてください。

A) 国際理解教育との出会いは、JICA 中部主催の「開発教育指導者研修」です。人類共通の課題や参加型手法について多くのことを学び、実践していく中で、国際理解教育がもつ力を感じました。また、JICA 主催の「教師海外研修」でブラジルを訪れ、生き生きと活動する青年海外協力隊の方々に出会ったり、アマゾンの奥地の学校を訪れたことから、「自分も現地で活動したい。その体験を生徒たちに伝えていきたい」と思い、現職教員特別派遣制度を利用して青年海外協力隊に参加しました。帰国後は、特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター(通称ニード)のメンバーになり、ワークショップに参加したり、ファシリテーションについて学んだりしています。

Q2) 学年や学校の異動、または管理職が変わったことで、これまでの実践を継続することに悩まれたことや、それを乗り越えて実践してこられたご経験があると思います。その際、どのような工夫をしてこられたのでしょうか？

A) 「できることから1つずつ」という気持ちで実践しています。それぞれの学校や学年のカリキュラムがあるので、必ずしも授業時間が十分にとれるわけではありません。私自身、そのことが悩みでしたが、「国際理解教育は理解教育」という言葉を聞いた時に「なるほど」と思いました。自己理解や他者理解があって初めて国際理解につながっていくのだと思います。日々の生活の中で国際理解教育の視点をもって、学級経営や授業を行なっていくのがよいのではないかと考えています。

【学級びらきやホームルームでのアイスブレイク】

4月の学級びらきやホームルームの最初に、アイスブレイクを取り入れています。簡単にできるものをいくつか紹介します。

- バースデーライン(言葉を使わずに誕生日順に並ぶ)
- 仲間さがし(お題に対し、同じ答えの仲間を見つけてグループになる)
- 名刺で自己紹介(用紙に、自分についてのいくつかの質問の答えを書き、紹介し合う)
- 4つのコーナー(教室の四つ角を利用して、出されたお題に対して、自分の考えに合うコーナーに移動する)

これらのアイスブレイキングのよさは、自分や自分の価値観をふりかえると共に、仲間の多様性や共通点に気づくことができるということです。すでに知り合っている仲間でも、様々なお題で自己紹介を繰り返し行くと、新たな気づきが生まれます。グループになって話すときは、話す順番をじゃんけんで決めがちですが、「朝一番早く起きた人から」「誕生日が早い人から」など指定すると、そこでも自分のことを話したり、お互いのことをより知ることができて、交流も活発になります。

少しずつ自己理解、他者理解が進み、教室が居心地のよい場所になることを願っています。

【ホームルームや授業に参加型手法を取り入れる】

開発教育指導者研修では、様々な参加型の手法を学びました。それは、普段のホームルーム活動や授業でも簡単に取り入れることができます。4～5人のグループで行います。

- 派生図(模造紙の真ん中にテーマとなる事柄を書き、その回りに関連することを広げて書く)
- ブレインストーミング(あるテーマについて、各自がマジックを持って様々な方向から思い浮かべることを伝えながら書く。他の人のアイデアからさらにイメージを広げていく。)
- KJ法(自分の考えをふせんに一つずつ書き出し、グループで同じ内容ごとにまとめてキーワードをつける)

このような手法を取り入れることで、一人ひとりの生徒の参加度が高まります。また、班で出た意見を共有する際、代表が発表するだけでなく、意見を書いた紙を班ごとに回して読み合い、「いいね」と思った意見に☆マークをつけたり、生徒が歩き回って意見を書いた紙を読んだり、黒板に全部貼って「いいな」と思う考えの紙にシールを貼ったりすると、生徒は他の意見に対しても肯定的にとらえたり、自分たちの意見を受け入れてもらったといううれしさを味わうことができます。

【教科の単元の中で、自分たちの暮らしとつなげる】

英語の教科書にグローバル 이슈に関する話題が取り上げられている単元では、内容理解と絡めて、自分とのつながりを考えられるように工夫しました。「水」をテーマにした単元では、生徒たちは ALT の母国であるフィリピンや、私が協力隊で活動したニカラグアの水問題について英語で聞いた後、他国の水問題について調べ、英語で紹介しあいました。きれいな水が十分に得られない人たちも多くいることを本文から読み取った後は、そのようなことが起こるとどうなるか、派生図を使って考え、「誰もがきれいな水にアクセスできるようにするために、私たちにできること」を話し合っ、簡単なプレゼンテーションを行いました。内容理解のみならず、世界の問題を自分ごととしてとらえ、一人ひとりの意識と行動が少しずつ変わっていくようにしたいと考えています。

継続して実践していくためには、自ら学び続けることが大切だと思います。国際理解教育に出会って10年が経ちますが、研修やワークショップでは毎回新しい気づきや学びがあります。また、ホームルーム運営や授業を行う視点も少しずつ変わってきて、「あの場面で、前回の研修でやったアクティビティを取り入れてみよう。」と思うことも多くなりました。国際理解教育を特別な実践ではなく、日々生徒とかかわる中で自然に取り入れられるようにしたいと思っています。

NIED のワークショップや、開発教育指導者研修では、国際理解教育やファシリテーションについて多くのことを学んだだけでなく、ネットワークもできました。同じ願いをもって取り組む先生たちからアイデアをもらうこと、励まされることもたくさんあり、このつながりを大切にしていきたいと思っています。地域の NPO や NGO 主催のイベント、ワークショップもたくさん行われているので、興味があるものは参加してみたらどうでしょうか。また、この

春、NIED・国際理解教育センターから、コミュニケーションの本が発行されました。様々なコミュニケーションのアクティビティ、国際理解教育とは、参加型手法、モデルプログラムの紹介などが載っているので、ぜひ読んで実践していただけたらうれしいです。

◇本タイトル:「よりよい未来をともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集
コミュニケーション編－他者に関わる力を育もう－」

◇発行: 特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター

◇団体ウェブサイト: <http://nied.love-hug.net/>